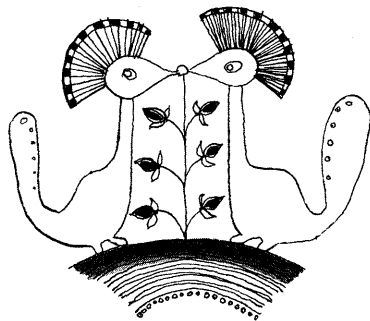


保育と保育学の専門性を問う

森上 史朗



私は、保育学は、幼稚園や保育園、家庭などで営まれている（或いは営まれてきた）保育という現象、ないしは行為の妥当性について、その判断の根拠を与える学問であると考えています。もちろん、その現象とか行為は広い意味であって、制度や歴史までも含むものとして捉えています。また判断の根拠となるものは、明確に意識化された

り、言語化されたものもあれば、実践者や研究者の中に暗黙に存在しているものもあります。それは一般に保育の理論と呼ばれているものです。保育学では単に事実を提示するだけでなく、それが保育にとってどういう根拠にもとづき、どういう意味があるかというような、広い意味での保育の理論を根底に据えて検討することが求められて

いるのです。そうした点で、実践者にも保育学の勉強は必要であり、また、保育学は実践者と研究者の協同作業によって作り出されていくものだと考えます。

ところで、その「保育学」は、私は、心理学や教育学、社会学、医学などとは違った独自の存在意義をもつ学問であるべきだと考えています。もちろん、それらの学問と共通する側面を多くもっていることは否定できませんが、しかし、保育学がそれらのものの「借りもの」や「寄せ集め」とどまっただけでは、いつもその下位に位置づけられたり、あるいは植民地的に扱われたりしてしまうでしょう。

事実、保育に関する学会では、それぞれの独自の学問分野では評価されないものまでが大手をふってまかり通っています。また、学会誌の審査などに当たっても、その分野の評価基準がそのま

まもちこまれて、「質の高さ」が問われたりしています。「学際的」といわれるシンポジウムに出てみても、視野が広がるどころか、それらの学問の悪しき部分に汚染されるのではないかと危機感を感じることさえあります。そういった点から、今早急に、保育学の独自の存在意義と独自の性格を明確にしておくことが必要ではないかと思えます。

臨床心理学者の河合隼雄氏は、学問に「男性の目」の優位なものと「女性の目」の優位なものがあるといいます。「男性の目」は現象を見る時、対象を自分から切り離して、その部分だけを客観的に捉えようとしています。これに対して「女性の目」は自他の未分化のままに、現象をまるごと主観の世界を尊重しつつ捉えようとしています。また、「男性の目」は普遍化をめざし、「女性の目」は個別性を浮きたたせます。「男性の目」に傾斜

し易い学問分野に比べて、「女性の目」が優位な保育学、看護学、臨床心理学などの分野では、学問体系を構築しにくく、そのため、心理学や教育学、医学などの「借りもの」に甘んじてきました。が、それではいつまでも「ほんもの」になりません。自分たちの独自の立場を明確にする必要がありません。

そのためにはどんなことが必要でしょうか。幾つかの要件の中から、今回は紙数の関係で一つだけとりあげてみます。それは実践と理論の関係の問い直しです。すなわち、保育の現実の営みは泥沼といってよいほどの複合性と不確実性の上になり立っていて、近代科学的な実践と理論の関係では捉えきれないような問題を含んでいます。たと

えば、実践者の在りようが子どもに影響し、子どもの在りようが実践者に影響し、その循環で作り出される保育のまるごとの状況や、実践者の体で感じている体感、保育中とその後に関わる思考様式、簡単に言語化できない雰囲気のようなものまでも抜け落ちないようにして追求していくことが必要でしょう。そうした点で研究者も「高み」からの観察ではなく、実践の中に入りこむ必要があるでしょうし、実践者にも混同としたものをそのままに終わらせない省察が必要とされるでしょう。そこに協同の作業の重要性が浮かび上がってくると思います。

(日本女子大学)